

## スメタナの聴覚障害と絵の謎

本日の演奏会がとりあげる作曲家ベートーヴェンとスメタナは、ともに聴覚障害に悩まされた。ベートーヴェンの場合は、20歳代後半から聴力の衰えが始まり、そのため彼は他人との会話を避けるようになり、苦悩と孤独の世界に入ってしまった。40歳代後半になると彼の耳は完全に聞こえなくなるが、その後57歳で亡くなるまで数々の傑作を生み出した。本日演奏される交響曲第5番は、彼が30歳代後半のときの作品であり、聴力が徐々に悪化する中で作曲された。

ベートーヴェンの聴覚障害が徐々に進行したのに対し、スメタナのそれは急激にやってきた。50歳の誕生日を迎えた1874年の春の時点では、彼の聴力には問題がなかった。ところが、その年の夏、彼の耳は突然異常をきたし、治療を試みたものの、秋にはほとんど聞こえなくなってしまった。当時のスメタナは、音楽活動の円熟期にあり、作曲家としてだけでなく指揮者としても大いに活躍していた。それだけに、急に聴覚を失ったことによる挫折と失望感はどれほど大きかったことか。結局、彼はプラハでの公的活動から退き、田舎で作曲に専念することになった。

ベートーヴェンの場合は、完全に耳が聞こえなくなった後は、耳鳴りがなくなり、全くの無音の世界で生きることになった。このため精神的には作曲に集中することができた。一方、スメタナは、聴力を失った後も耳鳴りに苦しめられた。私の知り合いに、耳鳴りに苦しんだ経験をもつ人がいて、私は彼に、耳鳴りはどんな音かと尋ねたことがある。彼が言うには「高い金属音のようだけど、何と表現したらよいかわからない」。治そうにも原因がわからないこと、そして耳鳴りのため夜眠れないことが彼を苦しめた。幸い、私の知り合いは、半年で症状が軽くなった。

スメタナの場合は、耳鳴りや幻聴の症状は悪化した。耳鳴りが終日続くために、1日に1時間以上は作曲できない日が続いたという。スメタナは作曲家であるから、自分の耳鳴りを音楽で表現できた。弦楽四重奏曲第1番「わが生涯より」最終楽章の終わり近くに、他の楽器が低い音をガサガサさせる中で、第1バイオリンが極めて高いE(ミ)の音をキーンと長く鳴り響かせる箇所がある。これが彼にとっての耳鳴りの表現であった。この失聴と耳鳴りの中、スメタナは名曲を生み出した。交響詩『わが祖国』の第1曲「ヴィシエフラド」と第2曲「モルダウ」は、耳が急に聞こえなくなった混乱の時期に作曲された。そして第6曲「ブラニーク」は、耳が完全に聞こえなくなり、耳鳴りがひどくなった時期に作曲された。

ベートーヴェンにしる、スメタナにしる、重い聴覚障害を負いながら、なぜ大編成のオーケストラ曲を作曲できたのか。しかも後世に残る傑作を。私には全くの謎である。高い才能とともに、芸術へのとてつもない強い意志があったのだろうと想像するしかない。

ところで、私にとってスメタナにはもう一つの謎がある。数年前、プラハにあるスメタナ博物館を訪れた。それは、ブルタバ川（モルダウ川）に架かるカレル橋のたもとにあった。博物館には、ピアノや楽譜などスメタナの遺品が展示されていたが、その中に、スメタナが描いた絵があった。ほとんどは、普通の紙や小さな写生帳に鉛筆で描かれた風景だった。スメタナがまだ健康であった時期に、趣味の狩猟に出かけた場面や、夏に家族と過ごした田舎の家をスケッチしたものだった。

ところが、展示された絵の中に、ほかとは明らかに異質な絵が数点あった。それらは「鳥瞰図」というべきもので、空からの視点で街や地形を描いていた。



<http://www.esbirky.cz/predmet/89731>

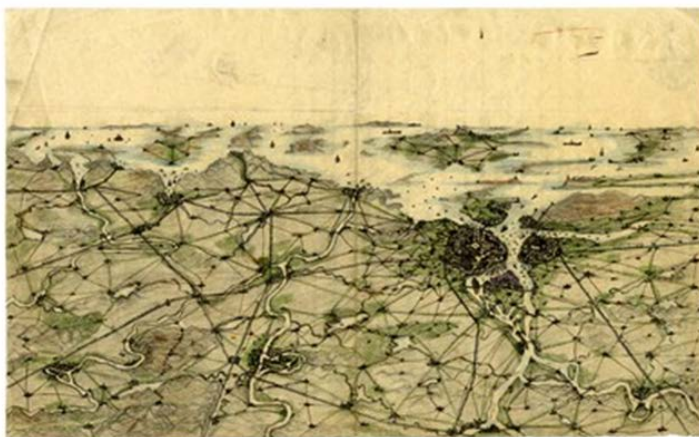
上の絵は、その一つである。14cm×21cm という小さな紙の中に、宮殿や教会のような建物と、それを取り囲む家並み、川沿いには並木、川か運河かわからないが、そこを行き交う船が描かれている。さらに細かく見ると、建物の前には、たくさんの人が描かれており、川沿いの道には車も描かれている。宮殿らしき建物の前方に停泊している船の周りには、小さな舢舨（はしけ）まで描かれている。極めて細密な絵である。ほかにも、似たような絵が2、3あった。スメタナはなぜこのような絵を描いたのか。絵の下には、博物館による説明のパネルが付けてあり、そこには、チェコ語と英語で次のように書かれていた。

「これらの絵の由来やテーマについては、ほとんどわからない。これらが、い

つ、なぜ描かれたのか、スメタナの想像で描かれたのか、それとも何か具体的なモデルがあったのかどうかもわからない。ただ、これらの絵が、スメタナが社会的な活動で忙しく、作曲の時間さえ見つけるのが忙しかった時期に描かれたとは考えにくい。さらに、失聴後のあと時期には、彼は大部分の時間を作曲に充て、悪化した健康状態のため、作曲に神経を集中しなければならなかった。一つの仮説として、これらの絵は、1875年の前半にプラハで描かれたのではないか。そのとき、(前年に聴覚を失った)スメタナは、医者から、治療の一環として数週間、他人との会話や音楽活動をいっさい禁じられた。彼は、この時間を過ごすためにこれらの絵を描いたのではないか」

この仮説が想定した時期は、まさしくスメタナが交響詩『わが祖国』を作曲していた時期である。『わが祖国』は6曲からなるが、6曲の表題はすべて、城跡や川や山など、スメタナの故国ボヘミアに実際にある場所を表している。スメタナは、治療のために『わが祖国』の作曲を中断せねばならなかったが、ボヘミアの風景を思い浮かべながら、鳥瞰図、つまり鳥の目という架空の視点からの自由な発想で、これらの絵を描いたのではないか。そして、急に襲ってきた聴覚障害への不安や悲しみの感情を忘れるため、鉛筆で細密な風景を書き込むことに集中しようとしたのではないか。

これらの風景画の中に、さらに他の風景画と異なる感じの絵があった。右の絵である。私は、この絵の前で釘付けになった。スメタナ博物館では、この絵も鳥瞰図の一枚として展示されていたのだが、鳥瞰図としては異様である。他の絵と違って建造物や木々が描かれていない。鳥瞰図としてみるなら、絵の中に何本かの



[http://www.rml.cz/\\_data/soubory/aktuality/vystava-kresby-bedricha-smetany/.kresba02\\_m.jpg](http://www.rml.cz/_data/soubory/aktuality/vystava-kresby-bedricha-smetany/.kresba02_m.jpg)

川の流れを見いだすことができ、右中央の川が集まるところに集落があるようにも見える。しかし、川や集落の周り一帯の土地を覆う放射線の編み目は何であろうか。鳥瞰図という先入観なしにこの絵だけを見れば、神経回路の図に見えなくもない。

実は、私がこの絵に釘付けになったのは、私の専門が地理学だからである。私は、この絵を見て即座に「中心地理論」を思い浮かべた。中心地理論とは、商品やサービ

スを周辺に供給する場所を中心地（都市でも店でもありえる）と見なし、中心地の空間的配列（立地）の原理を追求した理論である。ドイツの地理学者クリスタラーが1933年に出版した『南ドイツの中心地』（日本語版題名『都市の立地と発展』）という本で提唱した。私は、この本の中にある地理学の教科書にも登場する図（右の



クリスタラー著『南ドイツの中心地』より

図）を思い出したのだ。クリスタラーの図

では、放射線は、大きな集落（中心地）どうしの位置関係を示すために引かれている。

スメタナはドイツ語に堪能であったが、19世紀の人なので、20世紀に生きたクリスタラーの図を見ているはずはない。いったいスメタナの絵の中の、網の目状の線と、線の結び目に位置する黒い点の数々は、何であろうか。

スメタナは、晩年、しばしば精神に異常をきたし、幻覚を見たり、錯乱して、もうこの世にはいないモーツァルトやベートーヴェンに手紙を書いたりしたという。スメタナの絵は、幻覚の予兆のなせるものなのか、それとも何かまともな意図や根拠があったのか。おそらく永遠に解けない謎であろう。

（[名古屋大学交響楽団第115回定期演奏会パンフレット](#)）